寺尾 聰
原田美枝子
吉岡秀隆
鶴田真由
國村 隼
伊原剛志
高島礼子
石橋蓮司
井川比佐志
樹木希林
奈良岡朋子
柴田恭兵

原作／横山秀夫（講談社刊）
脚本／田部俊行　佐々部 清
撮影／長沼六男
監督／佐々部 清

「半落ち」製作委員会
東映
TBS
住友商事
東京都ASA連合会
配給／東映

私は、最愛の妻を殺しました。

男は自首までの、空白の二日間に何をしていたのか。妻が遺した新聞記事。男はなぜあと一年だけ生きようとしているのか。"命"の意味を問いかける、衝撃と慟哭のベストセラーミステリー大作「半落ち」。横山秀夫文学の最高峰、初の完全映画化である。

半落ち

【はんおち】警察用語。容疑者が容疑を一部自供するも完全に自供してはいない状態を指す。

「"祈り"と"癒し"のラストシーン」で明かされる、梶が頑なに守り通した「命の真実」とは!?

イントロダクション

30万部を越すベストセラー記録を樹立した横山秀夫ワールドの最高峰『半落ち』が、遂に初の完全映画化される。『このミステリーがすごい！2003年版』(宝島社)『傑作ミステリーベスト10』(週刊文春)で、いずれも1位に選ばれた原作の底力が、これ以上ない配役を得て、いよいよスクリーンに登場する。

現在も異例の重版を重ねて読み継がれている、感動と衝撃のミステリー『半落ち』。愛する妻を手にかけた、元捜査一課の敏腕警部。彼が自首するまでの「空白の2日間の謎」を追う幾多の人々。が、この作品は、警察というフィールドで展開されるまぎれもないヒューマン・ドラマである。年齢を重ねるにつれ、人はさまざまな理不尽を呑み込んで生きていかねばならない。その現実に対峙し、何を、どう選ぶのか？状況に流されず、自らの生き方を選び取っていくのは容易ではない。アルツハイマーの病状が進む妻に懇願され、嘱託殺人という重罪を犯した主人公・梶聡一郎。その心の襞を探っていく物語は、いつしか彼を取り巻く人々の心のうちまでも照らし出していく。『半落ち』に仕込まれた"合わせ鏡"の見事さは、登場人物たちはもとより観る者をも巻き込んで、自分の〈今〉のありようを見つめさせるのだ。

沈黙する梶総一郎に、取調官の志木が投げかける「言わないのは、あなたが嘘をつけない人だからだ」という言葉。そこに示し出された〈嘘〉は、私たちの魂を根底から揺さぶる！

主人公・梶聡一郎を演じるのは「雨あがる」「阿弥陀堂だより」の寺尾聰。事件の真相を追う志木刑事に、柴田恭兵。梶の妻・啓子に「OUT」の原田美枝子、その姉康子に樹木希林、判事に「Dr.コトー診療所」の吉岡秀隆、さらに鶴田真由(新聞記者)・伊原剛志(検事)・國村隼(弁護士)、高島礼子、石橋蓮司、井川比佐志、西田敏行、奈良岡朋子らと、実力派キャストが揃う。監督はデビュー作「陽はまた昇る」で高い評価を得た佐々部清。撮影を、「たそがれ清兵衛」「学校」で各種映画賞に輝いた長沼六男。人の心の内奥にある〈ミステリー〉を炙り出し、スクリーンに陰影深く焼き付ける。

2004年最高の話題作。「命」の意味を問う、感動と衝撃のミステリー初の完全映画化。

半落ち

【はんおち】警察用語。容疑者が自白を一部保留する状況を指す。

物語

「私、梶聡一郎は、3日前、妻の啓子を、自宅で首を絞めて、殺しました」

半生前、アルツハイマー病を発症した啓子の看病の為、自ら刑事を辞して警察学校で後進の指導にあたり、広く敬愛を集めてきた梶が、なぜ殺人を犯したのか。

志木の取調べに対して、啓子の扼殺後自首してくるまでの2日間のことについて、固く口を閉ざす梶に志木のみならず、駆け付けた県警幹部すべてが困惑する。現役警部の殺人という一事件が、県警そのものの権威と、そこに属する何千という警察官の信用を地に墜とそうとしているのだ。取り調べにあたる志木に、誘導尋問で「空白の2日間」を捏造した事実で穴埋めするように、命じる県警幹部たち。7年前に一人息子の俊哉を急性骨髄性白血病で14歳の誕生日を待たずに亡くし、寄り添うように生きてきた夫婦に、一体何があったのか。

事件の推移と共に、担当検事(佐瀬)、弁護士(植村)、スクープを狙う新聞記者(中尾)、裁く判事(藤林)が、各々の人生を背負い、思惑を抱え、事件の真相を暴く為に、梶の人生、梶という人間そのものに近付いていく。

〈真実〉を探り出そうとする志木。県警と地検の取り引きでやむなく手を引く佐瀬。これを機に名を上げようと、意気込んで梶との接見に臨む植村。梶の「空白の2日間」の行動の一端を掴む中尾。公判で、啓子と同じ病を持つ父のことが脳裏を掠める藤林。そして、亡くなった俊哉の担当医、高木の「俊哉君の発病から間もなく、ご夫妻でドナー登録されたんです」という言葉。裁判の証言台で、「私は…啓子を殺してやることもできなかったんです…」と泣き崩れる、姉・康子。保管している啓子の日記に貼られた、「命をありがとう」と題された投書記事。弁護を引き受けた植村に梶が問い掛ける、「あなたには、守りたい人がいませんか」という言葉……

"来るべき日"を待ちわびる梶の、どんな犠牲を払い、誹りを受けようとも、あと1年だけ生きようとしている梶の人生の〈真実〉とは!?

人は何を支えに、何を励みに、生きるのか。人が、人として、輝いて生きるための"よすが"を——。

男はなぜ、最愛の妻を殺したのか—
男はなぜ、あと1年だけ、生きる決心をしたのか—?